

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21792216

研究課題名(和文) 外来治療を受けるがん患者を支える家族の悩みや負担に関する実態調査

研究課題名(英文) The research on a trouble and a burden on family of outpatients with cancer.

研究代表者

二井谷 真由美 ( NIITANI MAYUMI )

広島大学・大学院保健学研究科・特任助教

研究者番号：30326441

研究成果の概要(和文)：

広島県内のがん診療連携拠点病院9施設の外来で治療を受けているがん患者の家族(患者が主たる支援者と認知している者)1048人に調査票を配布し、663通の返信を得た(回収率:63.3%)。家族が抱える悩みとして最も多かったのは「患者の今後の治療や将来について(34.3%)」、つづいて「患者の痛みや副作用等の身体的苦痛(31.9%)」、3番目は「患者の不安や恐怖など精神的苦痛(14.4%)」であった。負担については、「なし」と回答した家族が最も多く(31.0%)、つづいて「収入、治療費、貯蓄などの経済的なこと(22.2%)」であった。

研究成果の概要(英文)：

We distributed a questionnaire to 1,048 families (the person whom the patients recognize with a main supporter) of outpatients with cancer in 9 hospitals in Hiroshima. We obtained 663 replies (recover rate: 63.3%). The largest trouble of the family "was about the future treatment and future of the patients" (34.3%), the second "physical pain (31.9%) such as a pain or the side effect of the patients", the third "were mental distress including anxiety and the fear of the patients" (14.4%). About the burden on family, there were the most answers "that there was not" (31.0%), and the second "was economic things such as an income, treatment costs, savings" (22.2%).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん 家族 看護学

## 1. 研究開始当初の背景

医療改革の波は病院機能の分化、医療費の削減、入院日数短縮化を促し、入院医療から外来医療に向かって進んでいる。がん医療の分野においてもそれは例外でなく、化学療法による薬物有害反応を良好にコントロールできる薬剤の開発や、放射線治療技術の向上に伴い、外来通院がん患者が増加している。

この変化は、生活様式に大きな変化をもたらすことなく、家族の支援を受けられやすい環境の中で治療を継続でき、患者にとって高い QOL が維持されるという利点がある反面、従来は入院しながら医療者の援助を得て解決していた問題に対し、患者と家族が自らの力で対処しなければならない現実をもたらしている。坂らが 2004 年に実施した 200 床以上の病院全国調査によると、一日に外来で化学療法を受けた患者は約 26,200 人、放射線照射を受けた患者は 7,750 人であり、患者数は今後ますます増加するといわれている。

また、がんの診断を受けることは、患者本人にとって大きな衝撃であることはもちろん、患者の最も身近な存在である家族にとっても、非常に重要な問題となることは容易に想像できる。患者自身の心理的な苦痛を受け止め、また、実際的な支えとなる役割を担わなければならない。特に、患者が外来で治療を行い、在宅で療養している場合には、その役割は家族にとって重くのしかかる。

上述したような状況におかれるがん患者家族の調査は、在宅末期がん患者の家族や外来化学療法中の家族を対象に調査されたものがほとんどであり、化学療法、放射線治療を含む外来治療中のがん患者家族を対象に量的に実態調査されたものはない。2007 年 6 月に策定された「がん対策推進基本計画」では、その最終目標として「がんによる死亡者の 20% 減」と「全てのがん患者・家族の苦痛の軽減・療養生活の質の向上」を掲げている。「全てのがん患者・家族の苦痛の軽減・療養生活の質の向上」のためには患者・家族の生の声からニーズを把握し、ニーズに適った施策を打ち出していく必要がある。本研究の結果から、家族が体験している悩みや負担、さらにその悩みや負担に対しどのように対処しているか、さらに、悩みや負担を軽減するために何が必要かも具体的に明らかになることにより、外来治療を受けるがん患者を支える家族への支援策を検討する際の有益な資料を提供できると考える。

## 2. 研究の目的

本研究は、外来治療を受けるがん患者を支える家族が、どのような悩みや負担を抱え、その悩みや負担に対して、どのように対処しているか、また悩みや負担を軽減させるため

に必要なと思うこと、について具体的に明らかにすることを目的とする。さらに、がん患者を支える家族の QOL についても明らかにする。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究デザイン

半構成的質問紙を用いた横断調査

### 2) 対象

広島県内のがん診療拠点病院の外来において治療を受けているがん患者の家族（患者が主たる支援者と認知している者）

### 3) 手続き

研究協力施設の倫理委員会においても承認を得た。その後、主治医の許可を得て、研究者もしくは研究協力者が外来にて通院治療中のがん患者家族に研究への協力を文書を用いて説明し、了解の得られた患者家族に質問紙を配布した。家族が付き添われていない場合は、患者の許可を得て家族へ質問紙を持ち帰ってもらった。質問紙には、返信用封筒と、研究の目的・内容・回収方法・非協力でも患者の治療に影響はないこと・返信をもって研究参加の同意とみなすことを記載した文書を添付した。質問票は郵送で返信してもらうよう依頼した。その際、封筒に氏名・住所を記載しないよう説明した。

### 4) データ収集法と調査項目

以下に示す項目についてデータを収集した。データ収集法は、対象となる家族に自記式質問紙を外来にて調査者が直接手渡し、郵送により回収するという方法を用いた。

- ①患者が外来で治療を受けている現在、どのような悩みや負担を感じているかについて
- ②①で回答した悩みや負担に対して、どのように対処しているか
- ③悩みや負担を軽減させるために必要だと思うことについて
- ④QOL : WHOQOL-26 を用いて測定
- ⑤対象者の人口統計学的変数（年齢、性別、職業、健康状態、経済満足度、患者との続柄）
- ⑥患者の医学的変数（病名、病期、Performance Status、がんと診断された時期、これまでの治療内容）

### 5) 分析方法

以下の方針で分析を行った。

- ①対象者の背景因子の分布を記述した。分析には SPSS Ver. 17.0 を用いた。
- ②家族が記載した「悩みや負担」、「その悩みや負担に対して、どのように対処しているか」、「悩みや負担を軽減させるために必要だと思うこと」について、意味のわかる単位で

抽出し、意味内容が損なわれないよう簡潔に要約してコード化した。次に、コード化したものの意味内容の類似性に従って整理・統合し、それぞれについてカテゴリー化し名称をつけた。分析の全過程を、がん看護と家族看護の専門家（研究協力者）と共に行った。③WHOQOL-26 の得点を記述した。

#### 4. 研究成果

広島県内のがん診療連携拠点病院である広島大学病院、県立広島病院、広島赤十字・原爆病院、広島総合病院、呉医療センター、東広島医療センター、市立三次中央病院、福山市民病院、尾道総合病院、9 施設の外来で治療を受けているがん患者の家族（患者が主たる支援者と認知している者）もしくは患者 1048 人に調査票を配布し、663 通の返信を得た（回収率：63.3%）。患者が回答していた 5 通を除いた 658 通を分析対象とした（有効回答率：62.8%）。

性別は男性 217 人（33.0%）、女性 437 人（66.4%）、無回答 4 人（0.6%）であった。平均年齢 59.51 歳（SD13.07）で、患者との続柄は、「配偶者」が最も多く 466 人（70.8%）、つづいて「子ども」125 人（19.0%）、「親」26 人（4.0%）などであった。就業状況について、「常勤」199 人（30.2%）、「非常勤・臨時雇用」83 人（12.6%）、「専業主婦」210 人（31.9%）などであった。経済満足度について、「とても充分」と評価した対象者が 14 人（2.1%）、「充分」79 人（12.0%）、「まあまあ充分」241 人（36.6%）、「あまり充分でない」212 人（32.2%）、「まったく不充分」102 人（15.5%）、無回答 10 人（1.5%）であった。健康状態について、同年代の人と比べて「悪い」と評価した対象者は 191 人（29.1%）、「だいたい同じ」328 人（49.8%）、「良い」135 人（20.5%）であった。

家族が抱える悩みとして最も多かったのは「患者の今後の治療や将来について」226 人（34.3%）、つづいて「患者の痛みや副作用等の身体的苦痛」210 人（31.9%）、3 番目は「患者の不安や恐怖など精神的苦痛」95 人（14.4%）、4 番目は「なし」45 人（6.8%）、5 番目は「収入、治療費、貯蓄などの経済的なこと」31 人（4.7%）であった。

負担については、「なし」と回答した家族が最も多く 204 人（31.0%）、つづいて「収入、治療費、貯蓄などの経済的なこと」146 人（22.2%）であった。

悩みや負担を軽減するために必要だと思うことについて自由記述で回答を得た。無回答や「今は何も分からない」と回答した家族が最も多かったが、「家族である私が頑張ること」、「くよくよしない」、「あきらめずに前向きに明るく過ごすこと」、などの『家族の前向きな姿勢』がその次に多かった。また、

「入院期間の延長」や「送迎サービスの充実」など、外来治療を受けるがん患者を支えていく為に、『サポート体制の強化』を求める家族も多かった。その他、「身内に話を聞いてもらう」や「色々な人に聞いてもらって気持ちを楽にする」などの『話を聞いてくれる人がいること』と回答した家族や、「社会保険制度の改革」や「治療費の軽減」などの『経済的支援の充実』と回答した家族もみられた。

患者の Performance Status（PS）の違いによる家族の悩みや負担、QOL の差異について分析したところ、PS が 0~3 の場合、状態が悪化していくにつれて、支える家族は患者の「痛みや副作用などの身体的な苦痛」「不安や恐怖などの精神的なこと」「今後の治療や将来について」の悩みが増える傾向にあった。しかし、PS4 の場合は、「今後の治療や将来について」の悩みは増加するが、患者に関する悩みが著明に減少し、支える家族自身の「体調などの身体的なこと」や「将来やこれからの生き方」が増加していた。負担については、患者の PS が 0~3 の場合、「なし」と答えた者が最も多く、続いて「収入、治療費、将来への貯えなどの経済的なこと」であったのに対して、PS4 の場合は、家族自身の「体調などの身体的なこと」が最も多かった。家族の QOL についても、患者の PS の悪化に伴って身体的領域、心理的領域で低下を認めた。また、社会的関係、環境についても PS の悪化に伴い QOL の低下を認めたが、PS4 の患者家族で「他者との関わり」や「環境」を悩みや負担として選択した家族はいなかった。他者との関わりを悩み、負担と感じる家族は PS1~3 に多い傾向であり、環境についての悩みや負担を記載していたのも、PS1~3 の患者家族のみであった。

以上のことから、経済的問題を抱えながら、患者の心身両面の対応に苦慮している家族の姿が明らかになった。医療者は、がん治療が外来に移行してきた現状の中で、患者を支えている家族にも目を向け、在宅で症状を適切にコントロールするための情報提供や、社会資源の紹介、家族の心身の負担への配慮などを行っていくことが大切である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 1 件）

1. 二井谷真由美、浅野早苗、札埜和美、織田浩子、面谷秀子、小杉恭子：外来治療を受

けるがん患者を支える家族の悩みや負担に関する実態調査. 第 48 回癌治療学会学術集会, 2010. 10. 28, 京都.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

二井谷 真由美 ( NIITANI MAYUMI )  
広島大学・大学院保健学研究科・特任助教  
研究者番号 : 30326441

(2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

(3) 連携研究者

( )

研究者番号 :